軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 59

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“馬女ネット”でのフットケア研修に臨んで

平成26年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業の一環として、平成26年５月19日、日高女性軽種馬ネットワーク会員を対象とした研修を実施しましたので、その概要を紹介します。

講演内容

「肢勢の見方」

肢勢を判断するに当たっての注意事項として、まずは各種の歩様について説明。駐立時は楽な立ち方や自由な立ち方を取ることが多いので、肢勢の判断に当たっては歩様を重視して、踏着時から負重極期までの肢のさばき方を良く観察する必要があります。次いで、前望では、肢も膝も球節以下も真直ぐな標準・軽い外向・強い外向・X脚・Offset Knee・球節内反・Zig_Zag、後望では、球節内反・川流れ、側望では、湾膝・凹膝・バレリーナシンドローム・浮尖などの各種肢勢の見方やその特徴を説明しました。

「当歳馬の肢蹄異常の実態調査(発症状況)」

当歳馬における肢蹄異常の実態を把握するための調査データを使い、その発症状況を報告しました。

調査対象馬は、日高管内、浦河から門別までの18牧場で2008～2012年の５年間に生まれたサラブレッド種247頭。生後２週間以内に初回検査、その後はおよそ３週間隔で、発症時期やその症状が落ち着く10月まで継続的に検査を行いました。調査に先立ち新たに作った用語であるZig_Zag・繋軸峻立・球節内反・浮尖について説明。肢蹄判定基準では、X脚や繋軸を例に挙げてGrade１～３の症状区分、Club Footでは国際的に使用されているDr.Reddenの４段階のGrade分けを説明しました。調査項目は、肢勢・歩様・球節状態・繋蹄状態など41項目に及び、解析項目は生まれ月別・性別・左右肢別・母馬年齢別・母馬産数別・牧場別・放牧地硬度別・発症月別・日齢別・削蹄頻度別などです。

結果として、20％を超える発症率を示した肢軸異常を先天性８項目、後天性２項目に分類し、発症状況を頭数別と肢別(Grade別)に示し、その中から統計的に有意差のあった項目や興味深い項目について説明しました。

講演の末尾では、本調査から明らかとなった日高管内の当歳馬の肢蹄異常の発症状況を説明し、またそれぞれの肢蹄異常について、生まれ月別、性別、左右肢別、母馬の年齢別、出産予定日との日数差別などの一部で、統計的に有意な差が認められたことも付言しました。これらの成果は、生産者、獣医師、装蹄師が同じ目線で、観察かつ判断するために必要な肢蹄異常の発症傾向を特定し、肢蹄異常の早期発見や予防に貢献する基礎資料になることから、日常の牧場業務に活かしていただくことを期待したいものです。

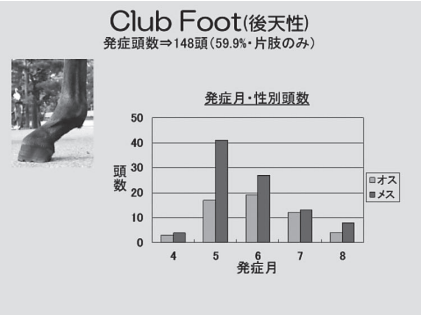
おわりに

今回は、「生産者等を対象とした研修」のため、最初に「肢勢の見方」について、スライドを用いて説明しました。その後、「当歳馬の肢蹄異常の実態調査(発症状況)」について報告しました。本調査報告は、平成25年12月18日「専門技術者を対象とした研修」で、北海道日高装蹄師会会員に対して使用したスライドに、発症肢数とGradeデータを追加したもので、スライドを用い１時間ほどかけて、より噛み砕いた説明を行いました。

説明後、40分に亘る質疑応答を通じて、肢蹄異常の発症状況や統計的な特徴は把握して頂けたようですが、その原因、肢蹄矯正方法、手術適応例などについてはまだ未消化のようでした。先天性では、母馬の子宮と胎児の大きさのバランスや体位、母馬のボディコンディションスコアが関連していると推察されます。また、後天性のClub Footでは、2003年に1,118頭を調査したところ、16％であったものが、今回60％と急増していましたが、その理由として、以前の調査では、Club Footへの認識が低かったこと、放牧地の広さや硬さが以前と異なること、またこの10年で明らかに栄養状態が変化したことが上げられ、中でも食餌との関連性は否定できないと考えています。矯正に当たっては、削蹄での矯正には限界があるので、その馬の状況に合わせて、充填剤や張出しプレートの応用が必要であり、基本的には、３～４ヵ月齢以内に治すことが好ましいでしょう。

少人数ながら活動的な女性のパワーを感じる研修会でした。また馬女ネット高村洋子会長から、「大変協力的な日本軽種馬協会に感謝するとともに、今後もこのような研修会への協力体制を築いていい頂きたい」と、感謝されると共に、さらなる依頼が寄せられました。

「肢勢の見方」の一枚



「当歳馬の肢蹄異常の実態調査（発症状況）」の一枚

講習会の様子